

高等学校・家庭基礎における消費者教育の展開

—食品ロスの授業を通して—

(家政教育講座) 竹下浩子、藤田昌子

(愛媛大学大学院教育学研究科) 宇都宮早智

Development of Consumer Education in Home Economics in a High School
- Through teaching about avoidable food waste -

Hiroko TAKESHITA, Atsuko FUJITA, Sachi UTSUNOMIYA

(平成28年7月18日受理)

抄録：消費者市民社会の構築に向けた消費者教育の充実をめざして、高等学校・家庭基礎における消費者教育の授業開発を行った。授業開発では、高校生の消費行動に関する意識調査を分析したうえで、環境や社会への影響を考えて消費行動ができる消費者市民の視点として、食品ロスの問題を取り上げた。そして、愛媛大学附属高等学校1年生を対象に、食品ロスについての授業を実施し、生徒の感想などから授業分析を行った。

キーワード：消費者教育、消費者市民社会、家庭基礎、食品ロス、持続可能な消費

1. 消費者市民社会と消費者教育

持続可能な社会の構築に向けて、近年、消費者の立場が問われている。1968年の消費者保護基本法から、2004年に消費者基本法が新たに制定されたことにより、消費者は、「保護される対象」ではなく、「自立した主体」として捉えられている。消費者の自立のためには、消費者が必要な情報を得て、積極的、主体的に行動できるよう、幼児期から高齢期まで一生涯にわたり、学校、地域、家庭、職場などで消費者教育が推進されなければならない。

そこで、2012年には、消費者教育の推進に関する法律¹⁾(以下、消費者教育推進法とする。)が制定され、家庭科教育においては、新たな視点からの消費者

教育の推進が求められている。消費者庁は、同庁のウェブサイト²⁾に消費者教育ポータルサイトを運営しており、閲覧者は、数多くの消費者教育の教材、講座、取り組みに関する情報を入手することができる。

しかし、家庭科教育での消費者教育は、消費者トラブルに関する授業を中心に、小・中・高等学校での系統的な消費者教育がすでに行われている。そのため、地球環境にも影響を及ぼしうる不公正な消費生活の現状を自覚しながらも、新しい内容の学習目標をどこへおくかについては、十分な議論がなされないままきている。

消費者教育推進法において、消費者市民社会は、「消費者が、個々の消費者の特性及び消費生活の多様性を相互に尊重しつつ、自らの消費生活に関する行動が現

在及び将来の世代にわたって内外の社会経済情勢及び地球環境に影響を及ぼし得るものであることを自覚して、公正かつ持続可能な社会の形成に積極的に参画する社会」と定義されている。消費者市民社会の実現に向けて、家庭科教育で求められる新たな視点とは何か、授業実践を通して、教師ひとり一人が考える必要がある。

本研究では、高等学校・家庭基礎における消費者教育の授業実践として、食品ロスの問題を取り上げた。調査方法は、まず、高校生の消費行動に関する意識調査を実施し、分析した。次に、食品ロスを題材として、授業開発・教材開発を行った。最後に、食品ロスについての授業を愛媛大学附属高等学校で実施し、生徒の感想などから、環境や社会への影響を考えて消費行動ができる、消費者市民の視点について考察した。

2. 食品ロスを題材として

食品ロスとは、食べられるのに捨てられてしまう食品のことで、食料ロス、フードロスともいう。食品廃棄物は、食品の製造・加工・流通・消費などの際、廃棄される食品の総称で、製造や加工の際に発生する廃棄物や、流通の際に発生する売れ残り、消費の際に発生する調理屑くずや食べ残しなどがあり、食品ロスもこれに含まれる。

農林水産省の平成25年度食品廃棄物利用状況の推計³⁾では、食品関連事業者によって廃棄として出される1927万トンのうち、可食部分と考えられる量（規格外品や返品、売れ残り、食べ残し）は、330万トンであった。一方、一般家庭によって出される家庭系食品廃棄物870万トンのうち、可食部分と考えられる量（食べ残しや過剰除去、直接廃棄）は302万トンで、食品関連事業者と一般家庭の可食部食品廃棄、いわゆる食品ロスは、それほど差がないといえる。

さらに、食品ロスは世界の飢餓問題にも関係している。国際連合食糧農業機関（FAO）の2015年報告書⁴⁾によると、世界では、およそ7億9,500万人（9人に1人）が、健康で活動的な生活を送るために必要かつ十分な食糧を得られていない。国連世界食糧計画（WFP）の報告書⁵⁾によると、2014年の世界の食糧支援量は、320万トンであり、日本の食品ロスによる廃棄量が、世界の食料援助量をはるかに上回っている。日本の食料自給率

が、カロリーベースで40%以下であり、年間5800万トンの食料を輸入している一方で、世界の食料援助量よりはるかに多い500万トン～800万トンの食品ロスをうみだしている背景は、国民ひとり一人の自覚だけでは解決できない問題ではなく、社会の構造そのものを変えていく仕組みづくりに目を向ける必要がある。

消費者庁の消費者教育の体系イメージマップ⁶⁾では、高校生期の特徴として、「生涯を見通した管理や計画の重要性、社会的責任を理解し、主体的判断力を高め、国際的な視点も養う時期」としている。そして、消費者市民社会の構築に向けては、「生産・流通・消費・廃棄が環境、経済や社会に与える影響を考えよう」、「持続可能な社会を目指して、ライフスタイルを工夫し、主体的に行動しよう」、「身近な消費問題及び社会課題の解決や、公正な社会の形成に協働して取り組もう」の3つを示している。消費者である高校生が、自分だけでなく、周りの人々や、グローバルな視点で社会・経済・地球環境にまで想像を膨らまし、持続可能な社会の発展に積極的に参画する市民性について考えるうえで、食品ロスの題材は、生徒の身近な生活に即した題材といえる。本題材は、環境や社会にとって良い商品を選択するだけでなく、食に関する購入、消費、廃棄という一連の流れを見据えた消費行動を考えることで、消費者市民社会の実現に向けて、主体的に行動する消費者の意識を育むことが期待できる。

3. 消費に関する意識調査

（1）調査概要

愛媛大学附属高等学校の1年生118名を対象に、質問紙による消費に関する意識調査を実施した。調査は、2015年12月8日と12月11日の授業開始直後に、一斉に質問紙を配布し、その場で回答してもらい、質問紙を回収した。そのため、有効回収率は、100%であった。質問紙の内容は、①属性、②生活での消費意識・行動、③消費者教育に関する知識、④食品購入時の選択基準についてであった。なお、統計の分析には、IBMのSPSS Statistics22を用いて行った。

（2）結果

回答者の属性は、男子44人、女子74人で、計118人

であった。

1) 環境へ配慮した消費行動

8項目の環境へ配慮した消費行動について、「あてはまる」、「どちらかといえばあてはまる」、「どちらかといえばあてはまらない」、「あてはまらない」の4段階尺度で尋ねた。ゴミを分別する、モノを長く使うの、2項目において、「あてはまる」または、「どちらかといえばあてはまる」と答えた生徒が、9割以上いた。一方、商品を購入するときは環境や社会への影響を考えてから選択する、成分表示や環境表示マークの確認をしてから購入する、の2項目について、「あてはまる」または、「どちらかといえばあてはまる」と答えた生徒は、4割または、それ以下であった。(図1)

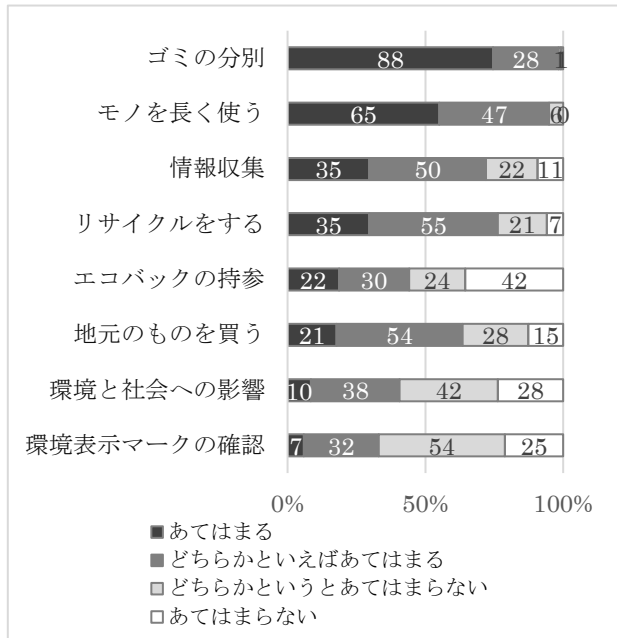


図1 環境へ配慮した消費行動 (N=118)

2) 消費に関する知識

消費に関する知識について、あなたは次の言葉をどのくらい知っていますか、という6項目の質問に対して、「説明できる」、「知っている」、「聞いたことがある」、「知らない」の4段階尺度で尋ねた。賞味期限、消費期限ともに、全員が、「説明できる」、「知っている」と答えた。一方、フェアトレード、食品ロス、フードバンク、消費者市民社会については、「知らない」と答えた生徒が、半分以上いた。(図2)

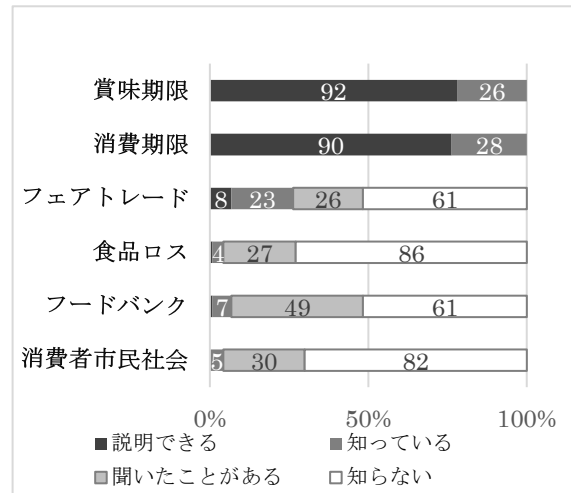


図2 消費に関する知識 (N=118)

3) 食品購入時の判断基準

あなたは食品を購入する際、どんなことを気にしますか、という質問に対して、「A メーカー」、「B 生産国」、「C 価格」、「D デザイン」、「E 新商品」、「F よく宣伝している」、「G チラシ」、「H 賞味期限」、「I いつも買っている」、「J 社会や環境に良い」、「K 原材料」、「L 製造者」の中から選び、回答してもらった(複数回答可)。最も多かったのは、「C 価格」(111人)であり、次いで「H 賞味期限」(79人)、「B 生産国」(70人)が多かった。一方、最も少なかったのは、「L 製造者」(13人)で、次いで、「J 社会や環境に良い」(15人)であった。(図3)

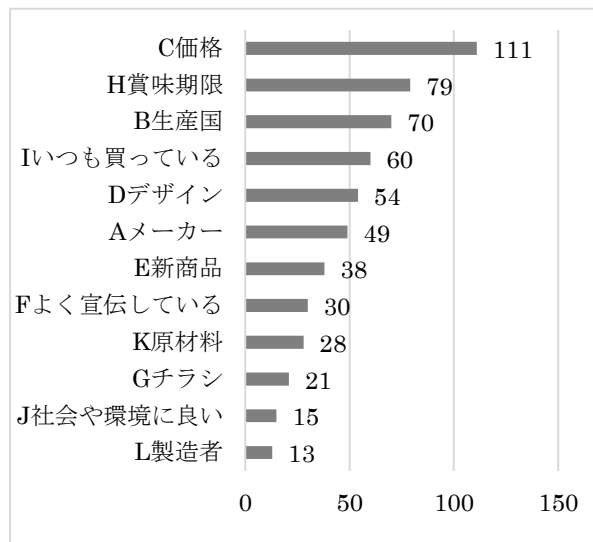


図3 食品購入時の判断基準 (N=118)

(3) 考察

モノを長く使い、リサイクルやゴミの分別を行ってい

る生徒が多い一方で、成分表示や環境表示マークの確認をしてから購入するや、商品を購入するときは環境や社会への影響を考えてから選択する生徒は少なかった。このことから、購入後の環境への配慮は行っているものの、購入時には環境のことをあまり意識していないことがわかった。

消費に関する知識については、生徒たちは1学期に食分野の学習を行っていたため、賞味期限、消費期限については、よく知っていた。一方で、フェアトレード、食品ロス、消費者市民社会は教科書にも記載されているが説明できるまたは、知っている生徒は少なかった。

食品購入時の判断基準では、価格の次に、賞味期限や生産国をあげた生徒が多く、購入する際には、食の安全について考えていることがわかった。しかし、環境や社会にとって、良いかどうかまでは意識しておらず、購入後の環境配慮だけでなく、購入する際に、廃棄までを見据えた商品の選択について考える学習の手立てが必要であることが分かった。

4. 「無駄のない消費」の授業実践

(1) 授業概要

愛媛大学附属高等学校の1年生の家庭基礎の授業（45分）において、「無駄のない消費」という題材の授業を実施した。授業者は、愛媛大学大学院教育学研究科2回生の宇都宮早智が担当し、2015年12月8日に2クラス、2015年12月11日に1クラスで実施した。

(2) 題材設定の理由

本題材は、生徒たちが1学期に学んだ食分野の学習と関連させて、グローバルな視点で消費の分野を学ぶことができるように、食品ロスの問題を取り上げた。本授業は、環境や社会にとってよりよい選択をするだけでなく、食品の購入・消費・廃棄という一連のプロセスを見据えた消費行動を考えることで、消費者市民としての意識について理解する内容とした。また、生徒自身の日常生活と世界の問題とのつながりを考えさせるために、クリスマスパーティーを行うという設定で、班活動を取り入れた。

(3) 教材

① 言葉と数字の関連クイズ

世界の問題に目を向けさせるために、言葉と数字の関

連クイズを班ごとに行った。これは、表には言葉、裏には数字が書かれた3種類のカードを班ごとに配り、それぞれの意味について考えるものである。例えば、食品ロスと世界で必要とされる食糧援助量の数についてのカードの表には、「食べない>食べたい」とあり、カードの裏には、「650万トン>470万トン」と書かれている。

(写真1～3)

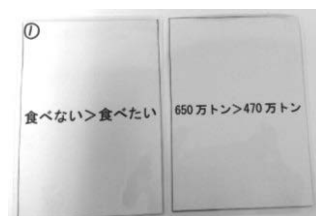


写真1

食品ロスと世界で必要とされる食糧援助量の数

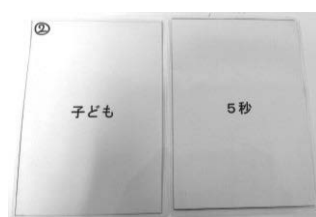


写真2

飢餓で亡くなる子どもの数

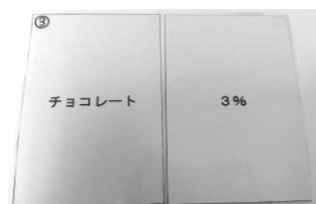


写真3

店頭で売られているチョコレートの金額のうち、カカオ豆生産者に支払われる収入の割合

②クリスマスパーティーを考えよう

授業の展開における班活動では、クリスマスパーティーを行うという設定で食器、生クリーム、チョコレート、野菜、飲み物、片付けの6項目それぞれに3種類ずつの選択肢を設け、各選択肢について消費者市民社会という視点から、コスト、環境・社会、健康、手軽さについて星5つで評価させた。生徒全員には、6項目が書かれたワークシートを配布した。しかし、班ごとでの話し合いは、時間の都合上、1班につき1項目について考えさせた。そのため、各班に1項目が書かれた模造紙を1枚渡し、3種類の選択肢のうちクリスマスパーティーで使いたいと思うものを1つ選ばせ、その理由について他の選択肢と比較させながら、評価の理由を付箋で模造紙に貼らせた。出来上がった模造紙は、黒板に貼り、班ごとに発表させ、全体で意見を共有した。資料1に、実際に行った授業の指導案を、表1に評価に使用した項目と選択肢を示す。

資料1 指導案

学年・組	1年2組	教室	1年2組教室	日時	平成27年12月8日 4限目	指導者 授業者	宇都宮 早智
単元	消費者市民社会の構築					教科書 (出版社)	家庭基礎 (開隆堂)
指導計画	1 無駄のない消費・・・1時間(本時)						
題材	無駄のない消費						
本時の 目標	○消費者市民社会の必要性に気づく。 ○自分たちの消費行動が環境や社会に与える影響について理解している。 ○よりよい消費行動について主体的に考えることができる。						
指導課程	学習活動			時間	指導上の留意事項		評価の方法・基準等
	導入	1. 普段の食にかかわる消費行動について確認する。		5	・普段の食にかかわる消費行動に関する簡単なアンケートに答えさせ、自分の消費行動を振り返らせる。		
	展開	1. 食品ロスや児童労働といった日本や世界が抱える食問題の現状を知り、消費者市民社会について考える。		8	・積極的にグループでの話し合い活動がおこなえるように、言葉と数字が裏表に書かれた3枚のカードを各班に配布し、必要以上の情報は与えない。		・消費者市民社会の必要性に気づく。 (グループ活動)
		2. クリスマスパティーをするという設定で、1グループにつき以下の1項目に対して消費者市民社会という視点で評価を行い、その理由を発表する。 (①食器 ④地産地消 ②賞味期限 ⑤飲料容器 ③フェアトレード ⑥残飯)		20	・自分たちの消費行動が環境や社会に影響を与えていることに気づかせるため、コスト、環境・社会、健康、手軽さについて、それぞれ☆マークで分かりやすく色を塗らせる。 ・個人の意見を拾えるよう、ポストイットに気づいたことなどを記入させ、模造紙に貼らせる。 ・発表で出てこなかった問題について、図や写真などを見せながら説明する。		・自分たちの消費行動が環境や社会に与える影響について理解している。 (グループ活動、模造紙・ワークシートの記入)
		3. 食品ロスを無くしていくための身近な取り組みについて知り、自分たちができることについて考える。		10	・身近な取り組みの例としてフードバンクやドギーバック等の事例を紹介する。 ・食べ残しについては食中毒などの問題についても触れ、消費者として捨てる判断の重要性についても説明する。		・よりよい消費行動について主体的に考えることができる。 (ワークシートの感想)
まとめ	1. 消費者市民という視点をもって意識し行動していくことの大切さを確認する。		2	・自分の行動を変えるだけでなく、商品表示や企業の取り組みなど社会のしくみを変えることの重要性を説明する。			
準備物	センテンスカード、ワークシート、パソコン、アンケート、模造紙・カード一式、スライド						

表1 評価に使用した項目と選択肢

項目	選択肢		
1. 食器	A. 家庭科室にあるものを借りる	B. 買ってくる(紙コップ、紙皿、割り箸) 計300円	C. 持参(タッパー、マイ箸、マイコップ)
2. 生クリーム	A. 泡立てる要あり 250円 賞味期限：16.02.09	B. 泡立てる必要あり(期限が近いため250円の3割引) 賞味期限：15.12.27	C. しぼるだけホイップ 200円 賞味期限：16.01.24
3. チョコレート	A. 普通の板チョコ 100円	B. 1チョコ for1 スマイルのチョコレート 100円	C. フェアトレードチョコレート 380円
4. 野菜	A. ミックス野菜 100円	B. にんじんを購入 2本 100円	C. にんじんを購入(不揃い品のため2本 100円の半額)
5. 飲み物	A. 紙パックジュース 1本 300円	B. 好きな缶を一人一本買って来る。1本 50円	C. やかんでもむぎ茶を沸かすパック(40人分)で計40円
6. 片付け	A. 捨てる	B. 持って帰る	C. 羊の餌にする

最後に、食品ロスをなくすための身近な取り組みとして、少量を注文すると安くなるレストランの事例、マイボトルを使用すると割引になる大学カフェの事例、フードバンクの活動紹介、野菜の廃棄部分を調理する、ベジブロスやきんぴらの調理例を紹介した。また、ドギーパックの実物を見せ、食べ残しについては、食中毒などの問題についても触れ、消費者として、食品をなるべく廃棄しないことともに、捨てる勇気の重要性についても説明した。

5. 結果

1) 生徒が選択したものと評価の視点

生徒が、コスト、環境・社会、健康、手軽さの視点から考え、各項目3種類から選択したものと評価の視点について、表2に示す。食器については、「持参」を選択したのが1クラス、「家庭科室(の食器)」を選択したのが、2クラスであったが、全てのクラスが、コストを高い評価基準にしていた。生クリームについては、「賞味期限が遠い」が1クラス、「しぼるだけ」が2クラスで

あった。「しぼるだけ」は、手軽さを評価の基準にしていたが、「賞味期限が遠い」を選択したクラスは、手軽さの評価が☆1と低いにも関わらず、環境、健康(評価☆4)を考慮して商品を選択していた。チョコレートについては、「フェアトレード」を選んだのが1クラス、「普通の板チョコ」を選択したのが2クラスであった。「フェアトレード」を選択したクラスは、環境、健康、手軽さの評価が高かった。野菜については、「ミックス野菜」が1クラス、「不揃い品」が2クラスであった。「不揃い品」を選んだクラスでは、コスト、環境、健康については高い評価(☆4~☆5)であったが、手軽さについては評価が分かれた。飲み物については、全てのクラスが「紙パック」を選択したが、5星評価の基準は、環境と健康に分かれた。片づけについては、「持ち帰り」が1クラス、「(校内の)羊の餌」が2クラスであった。どちらも健康と環境を評価の基準として選択していた。



写真4 商品を選ぶ様子(上)、模造紙で評価(下)

表2 生徒が選択したものと評価の視点

	組	選択したもの	☆5星評価の視点
1 食器	1組	C 持参	コスト、手軽さ
	2組	A 家庭科室	コスト
	3組	A 家庭科室	コスト、健康
2 生クリーム	1組	C しぼるだけ	健康、手軽
	2組	A 賞味期限遠い	
	3組	C しぼるだけ	手軽
3 チョコレート	1組	C フェアトレード	環境、健康、手軽
	2組	A 普通の板チョコ	コスト、手軽
	3組	A 普通の板チョコ	
4 野菜	1組	A ミックス野菜	手軽
	2組	C 不揃い品	コスト、環境
	3組	C 不揃い品	コスト
5 飲み物	1組	A 紙パック	環境
	2組	A 紙パック	環境
	3組	A 紙パック	健康
6 片付け	1組	C 羊の餌	健康
	2組	C 羊の餌	コスト、環境、健康
	3組	B 持ち帰り	環境

2) 感想文の分析

授業後の生徒の感想の分析結果を表3に示す。項目として、「生活の振り返り」、「授業内容（食品ロス、チョコレート、飢餓、言葉の意味・取組、その他）」、「班活動」、「自分の考え（考えて行動する、食品等の選択、選択の難しさ、その他）」、「今後に向けて（商品の選択、取組への参加、食べ残し、その他）」が挙げられた。

特に多く挙げられた項目は、今後の商品の選択（38人）、自分の考えとして、考えて行動することの大切さ

（32人）、授業で取り上げた言葉・取組について（29人）、授業で取り上げた食品ロスについて（27人）であった。感想から、多くの生徒が、食品ロスやフェアトレードなどの言葉を初めて聞いた、と答えていた。また、「1つのことにとらわれず、いろいろな目線でものを買うと、より環境や世界の問題の解決につながると思いました。」など、商品選択の基準として、様々な視点が必要だと考える一方で、その選択の難しさについても考えている生徒が多くいた。その他に、班活動により、他の人の意見を聞くことで、自分との考え方の違いを知ることができて、参考になったという生徒もいた。

表3 授業後の生徒の感想（3クラス）

項目	人数	記述例	
生活の振り返り	21	<ul style="list-style-type: none"> ・今までは、買うときはその後のことも考えたりしなかったし、余ってしまったときは大体捨ててしまうことが多かった。 ・今までは量、価格、味のみでいろいろな食品の判断をしていた。 	
授業内容	食品ロス	27 <ul style="list-style-type: none"> ・今回、食品ロスという言葉を知った。 ・一番驚いたのは、日本での食品ロスが、世界の食糧援助量より多いことだ。 	
	チョコレート	8 <ul style="list-style-type: none"> ・チョコレートは3%しかお金はいらないのはひどいと思った。とっても悲しい事実だ。 ・チョコレート1つ買うと1円の募金という取り組みは身近にでき、チョコレートだけでなく、いろんな商品でできたらいい。 	
	飢餓	9 <ul style="list-style-type: none"> ・世界には多くの人々が飢餓で苦しんでいるのは知っていたけれど、自分たちにできることはあまり考えたことがなかった。 ・子どもが多く死んでしまっているのが悲しい。 	
	言葉の意味・取組	29 <ul style="list-style-type: none"> ・初めて聞いた言葉ばかりだった ・フェアトレード、食品ロス、ドギーバック、フードバンクなど、聞いたこともなく意味も知らなかった言葉が知れてよかった。 	
	その他	10	<ul style="list-style-type: none"> ・知らない語句ばかりでもっとニュースをみようと思った。 ・身近な内容で考えるため、わかりやすく理解しやすかった。
			<ul style="list-style-type: none"> ・どの点が重要なのかを決めることができてよかった。
班活動	11	<ul style="list-style-type: none"> ・僕は非家庭的な男子なので、みんなの意見がとても参考になった。 ・みんなで考え、今まで考えていなかった視点でものごとを考えることができた。 	
自分の考え	考え行動する	32 <ul style="list-style-type: none"> ・自分のことだけではなく、環境のことや、社会のことを考えていく必要があると思った。 ・今回の授業で、自分の意識だけでけっこう違ってくると思った。 	
	食品等の選択	16 <ul style="list-style-type: none"> ・食品選択の上で賞味期限やコスト、環境への影響、手軽さなどを考えることはとても重要なことだと感じる事ができた。 	
	選択の難しさ	2 <ul style="list-style-type: none"> ・きがで苦しむ人のことも考えながら無駄がないようにと様々なことを考えたので難しかった。 	
	その他	4 <ul style="list-style-type: none"> ・今回の授業でコストだけを考えると買うのはあまり良くないとわかったが、実際はできるだけお金は使わないようにしたいし、他人の生活にまで気をくばり、自分の財産を使うのは難しい。 	
今後に向けて	商品の選択	38 <ul style="list-style-type: none"> ・買う前に、いろんなコストや環境社会などのたくさんの影響を考えて、物を買っていきいたい。 ・フェアトレードの物など、少したくさんのお金を払う分、世界の人たちの力になれるものを買うということも視野に入れつつ買い物をしたと思う。 	
	取組への参加	23 <ul style="list-style-type: none"> ・自分達の行動で社会に大きな影響を与えるのだということを知ることができたので、これからは環境について考えながら行動していきたい。 	
	食残し	8 <ul style="list-style-type: none"> ・私たちが今日からできることは、食べ物を粗末にしないことだと思う。 	
	その他	10 <ul style="list-style-type: none"> ・日本はとてもゆふく豊かな国で食料も充分あるけれど、他の食料が不足している国についても考えて行動したい。 	

6. まとめ

本研究では、高校生の消費者市民社会への意識調査として、質問紙調査を行うとともに、消費者市民社会の構築に向けて、自分たちの消費行動が環境や社会に与える影響について理解し、消費者市民社会の必要性に気づき、よりよい消費行動について主体的に考えることをねらいとして授業実践を行った。

質問紙調査から、高校生のフェアトレード、消費者市民社会、食品ロスの認知度の低さや、購入するには食の安全という面からは考えられているが、環境や社会にとって良いかどうかまでは意識していないことが分かった。そのため、自分の消費行動と環境や社会への影響とのつながりについて考え、自分の消費行動を見直すことができるような、消費者市民教育の学習が必要である事がわかった。

授業実践では、食に関する購入・消費・廃棄という一連の流れを見据えた消費行動について考えることで、使用した後のことまで考えて商品を選択するという視点でも判断する必要があるということに気づくことができた。また、環境や社会、健康など今までとは違った視点を設け、班で考えさせたことで、自分の意見だけでなく他の生徒の意見も参考にしながら視野を広げて考えることができた。パーティーをするときに一番使用したいと思う商品を選ばせたことで、コストのみ、環境・社会のみを考え選ぶと自分たちの生活や世界の問題に対し不都合がでてくること、その時の状況に応じた判断が必要であることも合わせて学ぶことができていた。授業では、日本や世界の食料問題を中心に扱ったが、食料自給率やごみ問題、食と健康に関する内容にも触れると、より自分の消費行動が世界に与える影響を実感できたのではないかと思われる。さらに、食材や食品の選択を疑似体験するだけに終わらず、調理実習等を通して実際に体験することで、定着をはかることができる。さらに、食生活に限らず、被服分野等においても消費者教育を意識して授業を行っていく必要がある。

今後、消費者教育の必要性はますます高まってくると考えられる。学校教育では、すべての子どもたちが、教科や総合的な学習等さまざまな方法で消費者教育を学び、家庭科教育ではそれを実生活につなげていく必要がある。本研究では、消費と食生活を関連させて食品ロス

をとりあげたが、環境分野では世界の水問題について、被服分野ではエシカルファッションについてとりあげると、自分の消費行動と社会や環境との繋がりに関して学べる題材は多くある。未来を担う消費者市民を育成していくために、消費トラブルへの対応だけでなく、身近なところから消費生活について考え意識を高めていけるよう、家庭科全体を通して消費者教育を学べるようなカリキュラムの充実がより一層求められる。

7. 引用・参考文献

<引用文献>

- 1) 消費者教育の推進に関する法律
<http://law.e-gov.go.jp/htmldata/H24/H24HO061.html>
 (2016.7.19 閲覧)
- 2) 消費者庁消費者教育ポータルサイト
<http://www.caa.go.jp/kportal/index.php> (2016.7.19 閲覧)
- 3) 農林水産省食品廃棄物の利用状況等 2013 年度推計値
http://www.maff.go.jp/j/shokusan/recycle/syoku_loss/pdf/25suikei.pdf (2016.7.19 閲覧)
- 4) 国際連合食糧農業機関 (FAO) 世界の食料不安の現状 2015 年報告書
<http://www.fao.org/3/a-i4646o.pdf> (2016.7.19 閲覧)
- 5) 国連WFP数字で見る国連WFP
http://ja.wfp.org/sites/default/files/ja/file/2014_ann_rep_japanese.pdf (2016.7.19 閲覧)
- 6) 消費者教育の体系イメージマップ
<http://www.caa.go.jp/kportal/search/pdf/imagemap.pdf>
 (2016.7.19 閲覧)

<参考文献>

- 岩本 諭、谷村 賢治、消費者市民社会の構築と消費者教育、晃洋書房、2013 年
- 愛媛大学附属高等学校他、平成 26 年度 消費者教育推進のための調査研究事業報告書、2015 年
- 大本久美子・鈴木真由子 「高等学校における消費者教育の現状と課題—家庭科及び社会科教員への質問紙調査をもとに—、大阪教育大学紀要 第V部門 第61巻、第2号、2013 年
- 消費者教育支援センター、先生のための消費者市民教育ガイド、消費者教育支援センター、2013 年

日本消費者教育学会関東支部、新しい消費者教育、慶
應義塾大学出版会、2016年

文部科学省、高等学校学習指導要領解説 家庭編、
2010年

渡瀬典子・八重樫英広・川越浩子・馬内幸恵・長澤由喜
子、小・中学校家庭科における『消費者市民』育成の
ための学習の検討、岩手大学教育学部プロジェクト推
進支援事業「教育実践研究論文集」第2巻、2015年

謝 辞

授業実践にご助言をいただいた、愛媛大学附属高等
学校の皆川勝子先生、東晃美先生と、質問紙調査およ
び授業実践にご協力いただいた、愛媛大学附属高等学
校の1年生の皆様にご心よりお礼を申し上げます。